

鹿島 昌也 (埋蔵文化財センター 専門学芸員)

納屋内 高史 (同 学芸員)

はじめに

富山市総在寺地区（旧・大利地区）に所在する高見家が、国道 41 号高規格道路建設に伴い移転が決まったことから、同家で所蔵していた縄文時代の石斧などをこのほど寄付いただいた。

高見家では『新保郷土誌』(p761) に「大利遺跡出土品」として紹介された金属製高杯を所有しておられ、実見および図化・写真撮影をさせていただいた。さらに、同じ郷土誌 (p758) に紹介された「梵字の石仏」についても触れる。



図 1 遺跡位置図

1 大利屋敷遺跡について

遺跡は神通川左岸の扇状地に位置し、標高 42~43m を測る。遺跡の東約 300m には、扇状地との比高差で 5m ある中位段丘の大沢野台地があり、西約 1km には神通川が流れている。

『新保郷土誌』によると大利地区には「昭和の初め頃まで大利の囲の鍵型の残跡があった。残跡は長さ 10m、高さ約 2m の土居で、周囲に堀が巡らされていた。」とあるが、土居などは土地改良で削平され残存していない。かつて「高貴な方がしばらくの間仮住居されたので、地名を「内裏」と書かれた」とされ、後三条天皇の第三皇子薦宮が承暦年間（1077~81 年）に越中に下向し、仮居住した遺址であるとの伝承（『肯構泉達録』）があるが、定かではない。

昭和 60 年には県営公害防除特別土地改良事業に伴う試掘調査が行われた。縄文晚期の円形落ち込みや平安期の土坑などを確認したが、屋敷跡や土塁などの痕跡は確認できなかった。出土遺物には、縄文晚期の土器や石器、平安期の須恵器・土師器があり、墓壙とみられる土坑からは平安末期以降に国内で流通した北宋銭「元豊通宝」（1078~85 年鑄造）が出土した。

2 縄文時代石器について

1~11 は打製石斧である。短冊形、撥形、分銅形の各形態があり、11 点中 9 点を撥型が占める。完形品が多く、法量は幅で概ね 70~90mm 前後、厚さで 20~40mm 前後に収まるものの、長さは 110~130mm 前後と 160~180mm 前後に分かれる。重量は長さ 110~130mm 前後のものは 200~400g 前後、160~180mm 前後のものは 400~600g 前後と長さに応じてほぼ二分される。石材はほとんどが安山岩である。製作技法について、1 は長楕円礫の縁辺を剥離、敲打し形状を作出するが、それ以外は円礫や砥石、石皿等から剥離した大型薄片を剥離、敲打により整形し形状を作出する。大型薄片を整形したものの中には、側縁部に階段状剥離痕の見られるものが存在し、形状の作出に垂直打撃技法が用いられたと考えられる。使用痕は、刃部が線状に刃潰れしたものや片刃状に摩滅したもの、刃部の主面片側が剥落したものが多く見られる。打製石斧の刃部使用痕は、鍬先として用いられた場合、使用痕が刃部の主面片側に集中することが指摘されており（板垣 2017 等）、本資料の傾向も鍬先としての使用によると考えられる。12 は砥石である。安山岩の大型薄片を用いた撥型の打製石斧を転用したとみられる。13 は磨石である。砂岩製である。14 は石鋸形石器とみられる。湾曲した内側に「刃部」を持ち、いわゆるバナナ形石器に類似する。半裁した砂岩の大型円礫の割れ口を更に 4

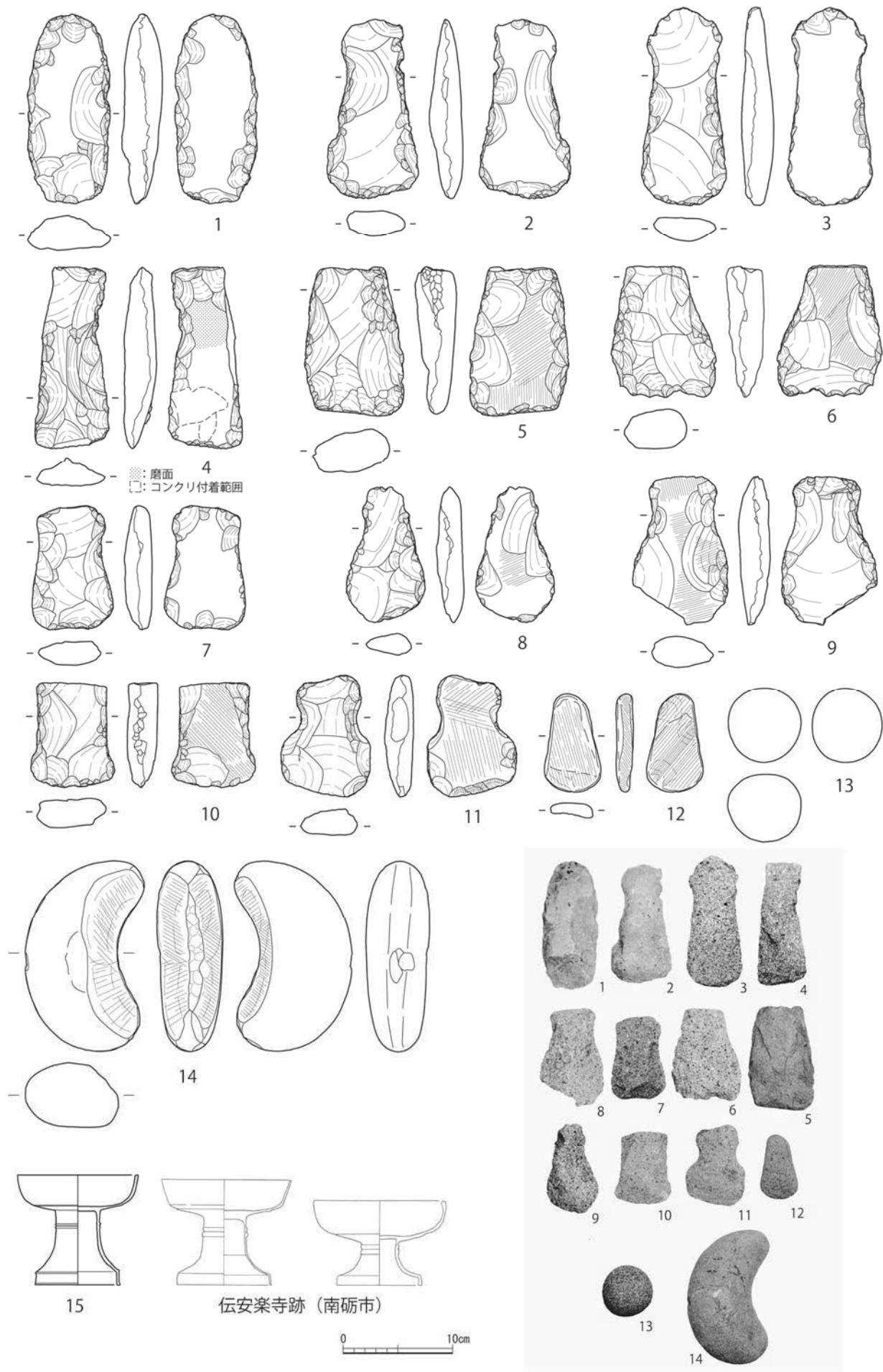


図2 出土遺物実測図および出土石器写真

表1 出土石器観察表

No.	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重さ (g)	石材	備考
1	打製石斧	172.0	76.0	32.0	541	安山岩	短冊形 扁平な長楕円礫の側縁部を剥離、敲打することにより整形 原礫面顕著に残る、使用痕は縦方向の剥離
2	打製石斧	163.0	82.5	24.1	380	砂岩	撥型 円礫から剥離した大型薄片を剥離、敲打することにより整形 原礫面顕著に残る 一部に階段状剥離痕が見られる 使用痕はあまり顕著でない
3	打製石斧	180.5	76.2	29.1	451	安山岩	撥型 円礫から剥離した大型薄片を剥離、敲打することにより整形 一面に原礫面顕著に残る 使用痕は潰れ
4	打製石斧	166.0	(66.2)	29.2	361	安山岩	撥型 石皿または砥石を打ち割ってできた大型薄片を剥離、敲打することにより整形 一面に擦り面残る 一部に階段状剥離痕が見られる 使用痕は刃部斜め方向の摩滅+細かな剥離 使用痕あまり顕著でない
5	打製石斧	(136.0)	90.0	40.0	545	安山岩	短冊形? 石皿または砥石を打ち割ってできた大型薄片を剥離、敲打することにより整形 一面に擦り面残る 一部に階段状剥離痕が見られる 刃部は水平方向に潰れ+摩滅
6	打製石斧	(120.1)	94.0	35.8	431	安山岩	敲打することにより整形 一面に擦り面残る 一部に階段状剥離痕が見られる 刃部破損 使用痕は細かな剥離
7	打製石斧	113.0	75.0	25.0	250	安山岩	撥型 円礫から剥離した大型薄片を剥離、敲打することにより整形 一面に原礫面顕著に残る 一部に階段状剥離痕が見られる 使用痕は縦方向の剥離+潰れ
8	打製石斧	123.0	71.5	19.5	180	安山岩	撥型 磨石または砥石を打ち割ってできた大型薄片を剥離、敲打することにより整形 原礫面顕著に残る 使用痕あまり顕著でない
9	打製石斧	135.5	87.0	28.0	360	安山岩	撥型 磨石または砥石を打ち割ってできた大型薄片を剥離、敲打することにより整形 一面に擦り面残る 一部に階段状剥離痕が見られる 刃部破損 使用痕は細かな剥離?
10	打製石斧	(96.0)	76.5	26.5	259	安山岩	撥型 石皿または砥石を打ち割ってできた大型薄片を剥離、敲打することにより整形 一面に擦り面残る 使用痕は刃部斜め方向の摩滅 使用痕あまり顕著でない
11	打製石斧	111.5	80.5	24.0	271	凝灰岩	分銅型 石皿または砥石を打ち割ってできた大型薄片を剥離、敲打することにより整形 一面に擦り面残る 刃部は片刃状に摩滅
12	砥石	89.5	51.5	14.8	82	安山岩	小型化した撥型打製石斧の全面を研磨 打製石斧は円礫から剥離した大型薄片を剥離、敲打することにより整形 一面に原礫面残る
13	磨石	68.0	66.9	61.8	391	砂岩	球形
14	石鋸型石器	174.0	84.0	58.5	1351	砂岩	バナナ型 円礫を打ち割った後、割れ口をさらに4回剥離することにより湾曲部と刃状部を形成 打ち割り部分を敲打+研磨することにより仕上げる

回剥離し、敲打、研磨を加え「刃部」を作出する。把手部の整形はあまり顕著でない。石鋸形石器は縄文時代晩期後半に盛期を迎える、県内では県東部に分布が集中する(小島 1985、麻柄 1986)。このうち、湾曲した内側に「刃部」を持つものは、南砺市田向遺跡の例が知られるほか、周辺地域の例では岐阜県高山市石原遺跡例が知られる。これら2例と比較すると本資料は粗雑な作りであり、未製品の可能性も含め、検討していくことが必要であろう。

今回寄贈された資料は、ほとんどが打製石斧で占められる点が特徴的である。北陸地方の縄文時代の石器組成は晩期後半になると打製石斧が大半を占める遺跡の多くなることが指摘されている(麻柄 2020)。本遺跡の1986年度調査で縄文時代晩期後葉の土器の出土が報告されていることも踏まえれば、このことは本資料の帰属時期が縄文時代晩期後半である可能性を示唆する。晩期後半に多く出土する石鋸形石器が含まれる点もこの可能性を裏打ちするものといえるだろう。本遺跡から出土した石器類については、1986年度調査で打製石斧1点の表採が報告されているのみであり、縄文時代の本遺跡でどの様な生産・生業活動が行われていたのか不明確な点が多かった。今回、寄贈された資料は縄文時代晩期後半の本遺跡において、同時代の他遺跡と同様な生産・生業活動が行われていたことを示唆するといえ、縄文時代における本遺跡の生活像を考える上で重要である。

3 金属製高杯、梵字の石仏について

金属製高杯（飯食器）（15）は、『新保郷土誌』に「大利遺跡出土品」として紹介されている。口径 11.0cm、高さ 10.0cm、底径 7.6cm を測り、表面に緑青の鋳が観察され、金銅製とみられる。杯部外面下部に 1 条の沈線を、脚部外面に紐帶を巡らせる。県内の出土類例として、南砺市梅原（旧福光町）の伝安楽寺跡周辺出土とされる飯食器 2 点（同市正円寺所蔵）がある。実測図を比較すると、高杯は伝安楽寺跡出土の器高の高い方の飯食器に似ていることがわかる。伝安楽寺跡には塚が所在し、塚上には石碑や五輪塔の地輪、水輪があり、出土品は寺院に関連したものと推測されている。

「大利遺跡」は高見家の南東に所在するが、高杯が出土した場所は、高見家の北側に位置する「大利屋敷遺跡」である。区画整理前まで、大利屋敷遺跡周辺は高見家の土地で、縄文時代の石器類もこの付近からの出土である。昭和 60 年の試掘調査では、平安末期以降の銭貨を伴う墓壙が検出されており、金属製の高杯もこの付近からの出土ならば、伝安楽寺跡の飯食器の出土例を参考にすると、平安末～中世前期頃の寺院に関連する品と推測される。

一方、『新保郷土誌』に紹介されている「梵字の石仏」について、これまで旧大利地区から大沢野台地上の大久保地区への登り口の路傍に石碑が立っていた（図 1）。長らく高見家が石碑周辺の草刈りを行っていたが、移転のため管理が行き届かなくなることから、高規格道路となる土地の残地の一角へ移設することとなった。聞き取りでは、この石碑についても、元は大利屋敷遺跡付近にあつたものを大久保集落への登り口に移設されていたようである。この石碑も寺院に関連した可能性が高い。旧大利地区の伝承とともに、今後さらなる検証が必要となるだろう。



金属製高杯



梵字の石仏

文献

- 板垣 優河 2017 「石器使用痕から見た打製石斧の機能—縄文時代生業の復元に向けて—」『古代文化』69, 古代学協会
小島俊彰 1985 「平村の縄文遺跡」『平村史 上巻』, 平村
新保校下自治振興会 1985 『新保郷土誌』
大工原豊・長田友也・建石徹編 2020 『縄文石器提要』ニューサイエンス社
(財)富山県文化振興財団 1994 『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告』
富山市教育委員会 1986 『大利屋敷遺跡試掘調査報告書』
麻柄一志・麻柄幸子 1986 「石鋸雜考—富山市野田遺跡採取の石鋸—」『富山市考古資料館報』14, 富山市考古資料館
麻柄一志 2020 「北陸地方」『縄文石器提要』ニューサイエンス社
吉朝則富 2017 「飛驒の石鋸型石冠について」『同志社考古』14, 同志社大学考古学研究会

令和 3 年度 富山市教育委員会埋蔵文化財センター所報

富山市の遺跡物語 №.23

令和 4 (2022) 年 3 月 31 日発行

編集・発行 富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒939-2798 富山市婦中町速星 754 婦中行政サービスセンター3 階

TEL : 076-465-2146 FAX : 076-465-5032

Email : maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印 刷 有限会社ヤツオ印刷